



Title	《犬の年》：視点のHeterogenitätについて
Author(s)	田中, 剛
Citation	独語独文学科研究年報, 11, 81-94
Issue Date	1985-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25695
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P81-94.pdf



《 犬 の 年 》

— 視点のHeterogenitätについて —

田 中 剛

1. G. Grassの長編小説《犬の年》が三部作中の他の二作、すなわち《Die Blechtrommel》並びに《Katz und Maus》で提起された語り手の視角と機能の問題性を、これらにおけるよりもさらに掘り下げている事実を看過することはできない。視点の多極化が現出し、語り手の構成するRomanweltがさらに Authentizität に関し限定を受けるのである。この小説の舞台となる戦前、戦中、戦後のドイツに住む一般的市民階級の内部で人知れず醸成された物心両面での諸矛盾・対立の深刻さを、作者Grassは三人の語り手から成る作家集団(Autorenkollektiv)に託して摘出し、読者の前で再現する。この論文では《Hundejahre》の内在的構成原理ともいべき視点のHeterogenitätの問題を絶えず念頭に据えながら、語りの技法上の特徴のみならず、語りそのものの poetikalisch な、または poetologisch な問題化を示す文体上の諸現象についても検討を加えたいと思う。

2. 語り手 Brauxelは読者の前に姿を現わすやいなや次のような言辞を述べる。

《Spieltrieb und Pedanterie diktieren und widersprechen sich nicht.》¹⁾

これはGrassのどの作品をも根本的に規定する〈phantastischer Realismus〉と同義である。〈Phantasie〉と〈Realismus〉の極めて奔放でもあり緻密でもある文体上の相関性によって、読者における視点の確定を妨げられ、唯単なるmehrperspektivischな文体以上の困難をその受容の過程で生じさせる。だが、この地点からこそGrassの文体の必然性も説明されねばならないだろう。

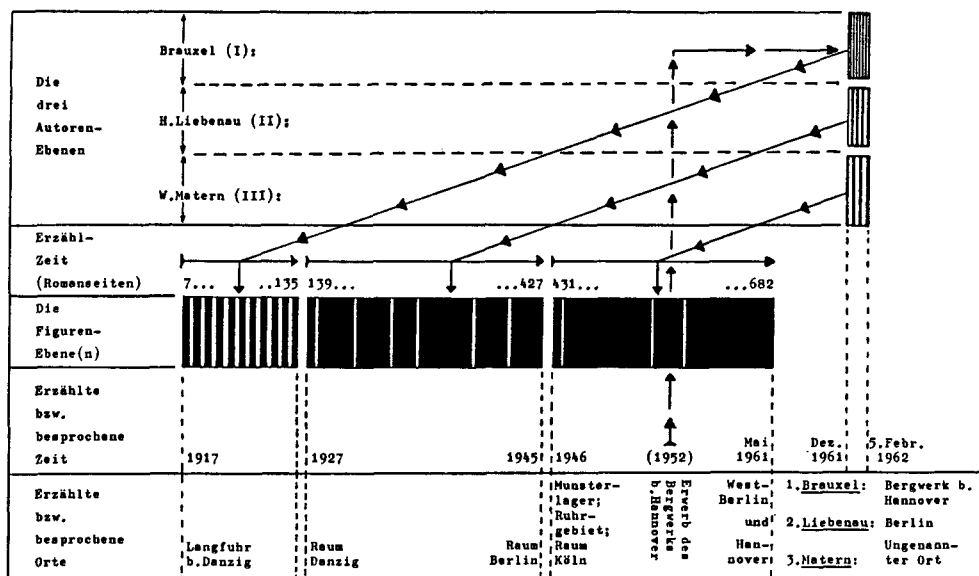
3. M. Harscheidtは《Hundejahre》の時制構造を厳密に分析したことで知られる。彼の著書《Günter Grass/Wort-Zahl-Gott》²⁾の中で挙げられたSchemaに筆者は依拠する。しかしこれはあくまで発見法的な意味で、これからの論考に役立つべく限定される。

Schemaを提示する前に、この小説の基本的な構成と筋を概略する。既に触れたように作者Grassにより設定された語り手は三人であり、互いに同時代人として戦前から第三帝国の登場、その消滅を、それぞれBrauxel—Harry Liebenau—Walter Maternが分担する。勿論語り

の対象の重点は異なるが重複する場面が多く存在する。物語は語り手三人の固有の視点から紡ぎ出される。過去に沈潜し、ここから滋養を得、半ユダヤ人として第三帝国に飽くまでも systemimmanentな存在であり続ける一方で、生命の危機を芸術の才能で回避する狡猾さも兼ね備えている人物として描出されるのは Amsel。彼と Blutsbrüderschaft を結んだ Matern の従弟 Harry が第二の書の語り手である。彼は 1927 年から 1945 年までの第三帝国の〈神話〉を冷徹な観察者として距離を保持しつつ眺める。しかし、彼自身自分を評して云っている如く、この人物の観察眼は思想の模倣と抒情癖に曇らされている。〈Zugucken und Nachplappern〉³⁾ が彼の本領である。Tulla に宛てた手紙形式の彼の語りは唯単なる文体上の要請であり、その Ich-Perspektive は絶えず Er-Form に立ち戻ろうとする。1945 年から 1957 年までの語りを織るのは Matern である。すなわち Amsel が案山子の製作により体制に対して両刃の剣を獲得し、それに見事に適応してゆき、Harry が夢想と非行動的な省察により現実の諸対象から距離を取るとすれば、第三の書の語り手 Matern は、社会に渦巻く順風と逆風の混沌をそのまま体現する人物である。彼は自嘲的に語る—〈Ein leerer Schrank voller Uniformen jeder Gesinnung〉⁴⁾。Matern は過去から逃走する。ドイツの〈Hundejahre〉を忘却し、過去を清算しようとする。だが彼がその限定された Perspektive から意識する過去の Leitmotiv は何か。それは Amsel に対する襲撃事件である。彼は云う—〈Es geht hier um Zähne, zweiunddreißig〉⁵⁾。以上の三人の語り手が物語る書は、それぞれ〈Frühschichten〉、〈Liebesbriefe〉、〈Materniaden〉という標題を冠せられる。

3.1 Harscheidt によるこの作品の chronologisch な構造は以下のような Schema で提示される。⁶⁾

Tabelle II: Chronologisches Schema der epischen Tempora:



3.2 ここに記入された語られた時間と説明された時間に関する年月を証拠立てるテキストの語りは次の如くである。

Erzählte Zeit

<1917>: <<……als die Welt im dritten Kriegsjahr stand, […] der taschenmesserwerfende Bengel bekam den Namen Walter vorgesetzt……>>⁷⁾

<<Walter Matern erblickte im April […] das Licht dieser Welt.

Die Fische des Monats März zogen … Eduard Amsel aus Mutters Höhle.>>⁸⁾

<1927>: <<Tulla Pokriefke wurde am elften Juni neunzehnhundertsiebendzwanzig geboren.>>⁹⁾

<<Als Tulla geboren wurde, war ihr Cousin Harry Liebenau einen Monat und vier Tage alt.>>¹⁰⁾

<<Am siebenten Mai, als Jenny Brunies etwa ein halbes Jahr alt war, wurde ich regelrecht geboren.>>¹¹⁾

<1945>: <<Am achten Mai neunzehnhundertfünfundvierzig, […] suchte sich (Prinz) westlich des Flusses (Elbe) einen neuen Herrn.>>¹²⁾

<1946>: <<……aber aus funkelndem Lenmetal läuten Altenas nicht eingeschmolzene Glocken die zweite Nachkriegsweihnacht ein.>>¹³⁾

<1952>: <<…… im Februar zweiundfünfzig […], unser Werk wurde […] an die Firma Brauxel & Co.…… überschrieben.>>¹⁴⁾

<Mai 1957>: <<Sendetermin: (voraussichtlich) achter Mai neunzehnhundert-siebenundfünfzig.>>¹⁵⁾

Besprochene Zeit

この時間を確定するのは、<Erzählte Zeit>の場合とは異なり、語りの表層における明示がない故により困難である。Harscheidtはこれらの日付けを次のようにして見出す。¹⁶⁾

まず第4・第10・第11の《Frühschicht》の語りから〈1 Frühschicht=1 Kalendarientag〉を、第12の《Frühschicht》で言及される歴史上の人物、Heinrich Kopf氏の葬儀からは、これが語られた時点を1961年12月28日以降と想定し、第13・第15・第20の《Frühschicht》をそれぞれ1961年12月31日、1962年1月初旬、1962年1月中旬と推測するがその際依り所とするのは〈Jahresende〉、〈zum Jahresanfang〉、〈Tauwetter〉等の時節の表現である。しかし、第25の《Frühschicht》において語り手Brauxelは重要なヒントを提示する。すなわちBrauxel社が〈この日〉フリードリヒ大王生誕250年祭を祝うと報告するのである。1712年1月24日という史実から、語りの時点は1962年1月24日であることがわかる。このようにして《Frühschicht》を追ってゆくと、Brauxelが筆を擱く第33の《Frühschicht》は1962年2月5日となる。また、執筆開始の時期も、第11の《Frühschicht》におけるBrauxelの語り、つまりクリスマス前後のこの人物の行動と年末行事に関する示唆から、この章が28日以降ではない、従って27日以前に語られたものであることを確認する。第10と第11の《Frühschicht》において明らかとなった原則を適用すると次のような仮定が成り立つ。

11. FS:	27. Dezember 1961
25./26. Dezember=Weihnachtsfeiertage: ✓	2 (Tage)
1. -10. FS = 10 Arbeitstage: .✓	10 (Tage)
	= 15. Dezember 1961

3.3 Autoren-Ebeneにおける執筆時の具体的な指示は、Harscheidtも指摘している通り《Liebesbriefe》において数ヶ所にまで減少し、《Materniaden》に至っては唯一つの不明瞭な暗示があるのみである。この事実の有する意味は次章以下での検討対象となる。

この作品のもう一つの特徴は、Erzähl-Tempoの側面から把握することができる。横軸に〈Erzähl-Zeit〉を、縦軸に〈Erzählte + Besprochene Zeit〉をとる《Frühschichten》の速度を基準にすると、明らかに語りの減速が生じていることがわかる。

《Frühschichten》	10 (Jahre) :	99 (Seiten) = 0,101
《Liebesbriefe》	18 (Jahre) :	219 (Seiten) = 0,082
《Materniaden》	12 (Jahre) :	191 (Seiten) = 0,063

この現象は、例えばT. Mannの《Der Zauberberg》におけるのとは対照的である。Maternは語る—《Matern schreibt Präsens: Jeder Feldweg ist ein Holzweg¹⁷⁾》。これとErzähl-Tempoとの間にはどのような連関があるのだろうか。

4. 始めにWeichselの流れがある。《1. FS》において語り手Brauxelは、語りの〈Beschwörendes Wort〉としてのこの河を、日没の幻影とともに喚び起こし、自らの語りのための記憶の地平（Erinnerungshorizont）を読者の前に描出する。¹⁸⁾

《 Die Weichsel ist ein breiter, in der Erinnerung immer
breiter werdender (…) Strom. 》¹⁹⁾

4.1 この意識的な記憶の覚醒の背後には、忘却の執拗な誘いが潜んでいる。Brauxelは、他の二人の語り手、Harry LiebenauとWalter Maternの語りの対象、時代を限定しそれぞれに分担させるべく機能する。三人が同時に執筆を開始する前に執筆計画がBrauxelから他の二人へ既に送られているばかりではない。進行中にも〈二度の作業打ち合わせ〉の機会をもち、原稿の締切り日も定められているのである。Brauxelは〈Ubiquität〉、〈Allwissen〉、〈Omnipotenz〉の所有者であると語られる。だが、これら語り手たちは、彼らの過去に対する視点の相違と執筆時における対象領域の限定によって等しくその認識を相対化されるべく定められている。語りの対象（das Erzählte）は線状に進展したり順序立てた展開をするのではない。語り手たちの意識の中に既に共時的に所与の過去をいかにして通時性の指標の下に組み変えるかが問題なのである。従って、Brauxelの語りを読者に対して《4. FS》において、この操作を開陳してみせる意味もそこにある。この場面ではMaternがAmselとの友情の象徴でもあり、また憎悪の呪物でもあるナイフをWeichselの河に投擲する過程が描かれる。時間の進行が〈mittlerweile-denn während(od. wenn)……〉という表現によって語られた時間と説明された時間に分断されつつも共存する。すなわち、この表現がここで頻出する時制（Praesens, Praeteritum, Perfekt, Plusquamperfekt）間の整流器の役割を果たすのである。換言するならば、ここではテキスト時間（Textzeit）と行為時間（Aktzeit）の可能な限りの一致が意図されているのである。語り手Brauxelが、何故にこうした遂行的な発話の形態を模倣するのかの問いは、ナイフという事物がこの人物にとって有している意義の重大さもまた示唆しているとの推測を読者側に喚び醒ます。なぜなら、語りの視点はこの場合Brauxelの主観にあるからである。ナイフ投擲の状況はMaternによっても、またLiebenauによっても決して詳述されることはない。この場面に現われた時制の交替は、以下に挙げる物語の冒頭から8段落目に至る語りの中で、既により鮮明な例を有している。このような語りの原理には作者Grassのどのような意図が含まれているのか、またそこからいかなる作家集団設定の意味が導き出せるのかが問題である。語りの層を〈Autoren Ebene〉と〈Figuren Ebene〉とに分ける。《1. FS》は次のように語り始められる。²⁰⁾

Abschnitt	Text (abgekürzt)	Ebene	Tempus
1. a	«Erzähl Du. Nein, erzählen Sie! Oder Du erzählst[...] der wollen wir abwarten, bis sich die acht Planeten geballt haben?»	(Aut.)	Präsens Perfekt
1. b	«Vor vielen vielen Sonnenunter- gängen, lange bevor es uns gab, floß, ohne uns zu spiegeln, tagtäglich die Weichsel und mündete immerfort.»	(Fig.)	Imperfekt
2.	«Der hier die Feder führt, wird zur Zeit Brauxel genannt, steht einem Bergwerk vor.»	(Aut.)	Präsens
3.	«Unreguliert und gefährlich floß früher die Weichsel. So rief man tausend Erdarbeiter.»	(Fig.)	Imperfekt
4.	«Der Federführende schreibt Brauksel zumeist wie Castrop- Rauxel.....»	(Aut.)	Präsens
5.	«Von Horizont zu Horizont liefen die Deiche der Weichsel.....»	(Fig.)	Imperfekt
6.	«Der hier die Feder führt, hat sich mit dreiundsiebzig Zigaretten- stummeln den Lauf der Weichsel auf geräumiger Schreibtischplatte zurechtgelegt.»	(Aut.)	Präsens Perfekt

7.	<<Vor vielen vielen Sonnenunter- gängen:da kommt der Herr Deich- regulierungskommissarius ...her, wo im Jahre fünfundfünfzig bei Kokotzko der Deich brach, er,...Wilhelm Ehren- tal, der ... jene 'Deichbeschauliche Epistel' geschrieben hatte, inspiziert das Deckwert>>	(Fig.)	Präsens Imperfekt Plusquam- perfekt
8. a	<<Linkerhand ging die Sonne unter [=a].	(a:Fig.)	Imperfekt
8. b	Brauxel zerbricht ein Streichholz [=b]: die zweite Mündung der Weichsel entstand am zweiten Februar ..., als der Fluß, weil das Eis sich gestaut hatte, unterhalb Plehn-	(b:Aut.)	Präsens
8. c	dorf die Nehrung durchbrach [=c] ...	(c:Fig.)	Imperfekt
8. d	Wir aber haben es ...mit den Dörfern der jüngsten Mündung zu tun ... [d] >>	(d:Aut.)	Plusquam- perfekt Präsens

4.2 この<<1. FS>>が含む erzähltechnisch な側面に関する問題は極めて重要である。まず、<1. a>の部分における人称代名詞の使用である。読者は<1. b>以下の語りからこの中の一人が Brauxelであろうと推測するが、どれとどれが ko-referenziell なのか同定できない。これは <Anaphora>-<Kataphora>の問題（例えば<7.>の<er,...Wilhelm Ehrental, der...>の如き表現）以上に、文学テキスト存立の前提条件、いわば読者が読書以前に意識として有している <literär>-<illiterär>なテキスト観念に関係してくる。²¹⁾この事実は当然 werkimmanent な観点からのみでは解決し得ない性質のものである。読者の役割が要請されているのである。²²⁾ また<2.>と<4.>におけるこの語り手の発言も謎めいている。<4.>の省略部分で彼は Weichsel 風に名をつづることもすると述べているのである。すなわち、<Brauxel-Brauksel-Brauchsel>が可能なのである。後にこの人物と<Amsel-Goldmälchen-Haseloff>との同定へ読者が導かれることを考え合わせれば、これは看過できぬ指標となる。Brauchsel の他の共同執筆者がこの事実を既に知っているが、語りの時点で彼ら自身が読者とともに同定作業を試みるべく全体が構成されている。語りの<Strategie>がここで明瞭となる。²³⁾

4.3 さて、上に掲げた< 1. FS >からの引用で、《Hundejahre》が二重の語りの層の平衡関係で語り始められ、またこれと密接に結合された時制の交替によって提示されることがわかる。すなわち、一方に< präsentische Tempora >である< Präsens >、< Perfekt >、< Futur >の群があり、他方には< präteritale Tempora >である< Imperfekt >、< Plusquamperfekt >の群がある。< Sprachperspektive >や< Sprechhaltung >の語り手における動揺と変化は必然的にこうした時制の交替の所産である。例証で示された如く、過去時制群で語られた Figuren - Ebene における語りの筋が中断され、現在時制群で語られる Autoren - Ebene に移調されると、語り手の< Sprechhaltung >は、説明された世界 (besprochene Welt) であるための諸条件を充足するような特定の視点へと交替するのである。但し、後に明らかになるように、《Hundejahre》のこの導入部、並びにそれに後続する各部における時制の交替は、最終的には Autoren - Ebene の無効性により、語り手それぞれの< Authentizität >のみならず、作家集団の検閲者すら自任する Brauxel の auktorial な立場もまた否定されるに至るといふ事情も考慮しなければ、作品全体に対して有するその意味も確定できないのである。²⁴⁾

ともあれ、既述したように、この作品の Figuren - Ebene における時制の基調は、Autoren - Ebene が原則的に時制群 I (besprechend. Tempus) を根幹としていたのとは異なり、時制群 II (erzählend. Tempus) である。《Frühschichten》を物語る Brauxel は< unechtes bzw. fiktives Präteritum >を使い、《Liebesbriefe》の Harry は同様に語りつつも、これを手紙形式の< Ich - Perspektive >により< echtes Präteritum >に変更すべく執筆当初に Brauxel の要請を受ける。《Materniaden》の Matern は、Brauxel、Harry の駆使する種々の時制が内包する< Heterogenität >を< historisches Präsens >で克服しようとする。だがこれら三人の語り手たちの用いる基本的な時制は各所で逸脱 (Abweichung) を欲するのである。すなわち Figuren - Ebene においても Autoren - Ebene に指定された時制が生じ、またその逆も頻出する。

《Frühschichten》における< unechtes Präteritum >が< historisches Präsens >に交替する例は次の如くである。(Amsel が粉屋 Matern の風車小屋の火をはげしい雪降りの中で Matern と眺め、神話の幻想に沈潜する場面) :

《Amsel sah was. Sein Freund sah nichts……Hintereinander fahren sie vor. Kutscherlos……Und ein kopfloser Ritter führt eine kopflose Nonne in die Mühle.》²⁵⁾

同様に《Liebesbriefe》においてもこの現象が見い出せる。(九名の覆面した人物たちに Amsel が襲撃されて雪だるまにされてしまう場面) :

《Tulla entließ die Krähen:

auf der Nordseite des Erbsberg sahen sie, daß die verummten
Männer ihren Kreis um Eddi nicht nur geschlossen hatten: sie
verengen ihn……》²⁶⁾

《Materniaden》では語り手 Matern が地の文で Tempusgruppe I 以外の時制を使用するのは極めてわずかである。しかし、彼の過去がイロニッシュに歴史化される場合にその例がある。(かつての分隊指導者だった Göpfert をムンスターに訪ね治療を受けた場面) :

《Geheilt ist der Edelschnupfen durch Stromschlag. Der Arzt half
sich selber. Der Hund Pluto schaute zu. Der ehemalige Haupt-
bannführer Göpfert schaute zu. Natürlich schaute auch der
liebe Gott zu.》²⁷⁾

5. 次に Autoren-Ebene における人称 (Person) の交替を取り上げてみよう。この観点から明らかになることを先取りすると、語り手が自己の視点を自由に選択し得るように、しかしその選択によるどんな語りも究極的には <negatives Vorzeichen> の支配の下にあるということである。この人称交替は Autoren- und Figuren-Ebenen の両面で生じる。

<14.FS> において Brauxel は Autor-Ebene の基調である三人称単複の視点を放棄して一人称複数で語る。

《Wie oft hat Brauchsel beiden Mitautoren den Arbeits-
vorgang beschrieben? Zwei Reisen, auf Gesprächskosten
der Firma führten uns zusammen……》²⁸⁾

この後半の文は Imperfekt を時制として有し、しかも Substituendum である <Mitautoren> がそれに対応する Substituentia <sie> で受けられていない。Brauxel の文体が <unechtes Präteritum> を基調にしていることを考え合わせると、この現象は視点の交錯であり、究極的にこれを統轄する Instanz ではないことを示唆していると思われる。ここから <Letzte FS> における三人称単数から一人称単数への移行も説明され得るだろう。Brauxel は Harry に第二の書の執筆権を与える前に、ダンチヒ並びにその周辺に関する知識を試問する。

《Auf Brauxels Frage … antwortete Harry Liebenau …: ‘ Das
tat der Polizeipräsident Froboess! ’ Doch, ich gab mich noch
immer nicht zufrieden. 》²⁹⁾

Figuren-Ebeneにおけるこの種の現象は、既に引用した導入部< 1. b >の例がある。

《Liebesbriefe》が有する Ich-Perspektive が <echtes Präteritum> の
時制を課せられているにも拘らず、絶えず Brief-Bericht、Erzählbericht の間を揺れ動き、
語り手 Harry の語りの流れは、この視点からする筋の展開のパラドシカルな苛酷さを浮き彫り
にしている。Harry はこの手紙形式を次のように冒頭から疑問視する— < Ich erzähle Dir.
Du hörst nicht zu. Und die Anrede […] wird der formale Spazierstock
bleiben, den ich jetzt schon wegwerfen möchte … >。Brauxel からの要請にすぎ
ないこの形式を、Harry は < erzählen > に置き換える準備を既にしているのである。こうした Harry の
ジレンマは自己の過去の叙事化を志向することにつながる。次のような体験話法はこの事情を推測させ
る。(Harry が Jenny が雪だるまにされたまま立つグーテンベルクの鑄鉄のお堂へひき返す場面)

《Und einmal - ich kam vom Amsels Garten zurück […]
Was sucht Harry? Sollte er nicht zum Abendessen?
Strafe. Poena. Gußeisen. 》³⁰⁾

そして最後はその Märchenform とともに始まる三人称の語りに至る。Harry はここ
において、彼について誰かが報告し、物語るような作中人物と化す。

《Es war einmal ein Cousin,
der hieß Harry Liebenau und eignete sich nur zum
Zugucken und Nachplappern. 》³¹⁾

《Materniaden》がこの種の人称交替を地の文で行なうのはむしろ例外的だと云って
よい。だが、《Frühschichten》における報告と符合する次のような語りは Matern の実際の視
点を示唆すると思われる。

《War bin krank. Habe hatte die Grippe. Legte aber mein
Fieber nicht ins Bett, sondern trug es ins 》Töff Töff 《

und lehnte es dort an die Bar. >>³²⁾

<103. Materniade>におけるEr-FormからIch-Formへの移調は、この作品全体のAnonymitätを示すものと云えよう。これは唯単に語りの表層に生じた視点の移動ではない。時制はPräsensを保つが、もはやある特定の視点を持ってはいない。(Brauxel商会の地下の案山子製造工場から地上に戻ったMaternのErzähl-Bericht)

«Und Dieser und Jener—wer mag sie noch Brauxel und Matern nennen? [...] Das Wasser laugt uns ab. Eddi pfeift etwas Unbestimmtes. Ich versuche ähnliches zu pfeifen. Doch das ist schwer. Beide sind wir nackt. Jeder badet für sich.»³³⁾

<Dieser>、<Jener>という指示代名詞はその内に不定代名詞<man>を含んでいる。<Jeder>は究極的にこれらを吸収する。

5.1 以上述べた点を図表にすると以下のような概観が得られる。³⁴⁾

Schicht/Buch	Erzählform	Grammat. Person	Primär. Tempus
bespr. Welt	Bericht mit Sprechsituation	'er'/'sie' ['uns'] ['ich']	Tempgr. I
erz. Welt I	episch. Erzähl-Bericht	'er' ['uns']	'unecht.' [histor. Präs.] Prät.
erz. Welt II	Briefbericht [Märchen-Rahmen]	'Ich'/'Du' ['sie'] ['er']	'echt.' [histor. Präs.] Prät.
erz. Welt III	episch. Erzählbericht	'er' ['Ich']	histor. Präs ['unecht.'] Prät.

6. 最後に《Hundejahre》における Autoren-Ebene の無効性について言及しなければならぬ。これまでの検討の基礎となっていたのは、これと Figuren-Ebene との二分法であり、時制と人称との関連も含めて作品の Heterogenität を明らかにする方向が保持されてきた。しかし、上掲の図表からも明らかのように、使用される時制、並びに人称の多様さは、各語り手の有する視点の Heterogenität まで想定させるのである。というのも、作家集団を主宰する Brauxel と Amsel の同定（語り手たちには当初から暗黙の了解事項である）が《103. Materniade》で明らかになるやいなや、それまで唯一人 Autoren-Ebene に止まると思わせたこの人物は、読者の前で突然、〈erzählte Figur〉と化すからである。語り全体の究極の校閲者であると称した Brauxel は今や読者による校閲を受けることとなる。Brauxel-Goldmülchen-Haseloff そして Amsel は極めて多義的に合成された人物なのである。この人物の4分の1ずつの分身は、視点の相対性の具象化である。他の二人の語り手は確かに始めから読者の目に同一人物であり続けるが、とりわけ Matern の語り手は、視点の絶えざる揺れ、あるいは語りの意識の分層性を提示すると思われる。彼がかつての同罪者を《Leichenhalle》で見出した時の語りは次のような流れを有する。

《Matern hat eine Frist und nagt an krummen Würzelchen/：Also, das war doch. Wenn das nicht das Schwein von damals./ Dem und den anderen hast Du es zu verdanken, daß Du./ Mit dem hätte ich noch ein Hühnchen […] 》³⁵⁾

この語りを分類すると〈Erzähl-Bericht〉→〈Monolog in Er-Form〉→〈Monolog in Du-Form〉→〈Monolog in Ich-Form〉となり、Autoren-Ebene 消滅の後では、この流れが唯一の視点特定的前提となる。しかし、ここでは例証できないが、その他にも体験話法と内的モノローグの境界で絶えず分光する意識の語りが各所にあることを考えればこの作品の構造が根本的に視点の Heterogenität に支配されていると認められるのである。

7. 本論は主として M. Harscheidt の前掲書に依拠して書かれたが、語りの構造を質的に規定する視点と、上述したような文体内部との関連記述はこの書にはない。彼はむしろ Grass のこの作品を特徴づけるものとして、auktorial な語り手を想定し、視点の問題を回避していると思われる。筆者はまた A. Goetze が Grass の手法の中に弁証法的な Erkenntnismethode を認めようとするのにも留保の立場を取りたい。³⁶⁾なぜなら Grass の文体とそれに伴う語りの手法は叙事的なより深い Erzählzwang に由来するからである。手法はこの源泉からの指令を伝達するための必然的な手段である。

《Laß den Faden nicht abreißen, Kinder! Denn solange wir noch Geschichten erzählen, leben wir. 》³⁷⁾

< 注 >

テキストはLuchterhand版（Günter Grass, Danziger Trilogie, Die Blechtrommel/Katz und Maus/Hundejahre, Hermann Luchterhand Verlag, 1980）を使用し、本文中<<Hundejahre>>からの引用の際、これを以下において<<Hj.>>と略す。

- 1) Hj., S. 627.
- 2) Michael Harscheidt, Günter Grass Wort-Zahl-Gott. Bouvier Verlag, Bonn, 1976.
- 3) Hj., S. 893.
- 4) Hj., S. 1007.
- 5) Hj., S. 1007; <Leitzahl>としての<32>については、Harscheidt(S. 343-347)を参照。Vgl. Volker Neuhaus, Günter Grass. Metzler, Stuttgart, 1979, S. 82-105.
- 6) Harscheidt, S. 46; この図式中、<<Materniaden>>のErzählte Zeitの終了をMai 1961としてあるのは1957年と訂正されねばならない。Erzähl-Tempoの算出は上掲のテキストによった。
- 7) Hj., S. 639.
- 8) Hj., S. 646.
- 9) Hj., S. 724.
- 10) Hj., S. 725.
- 11) Hj., S. 726.
- 12) Hj., S. 944.
- 13) Hj., S. 965.
- 14) Hj., S. 1114.
- 15) Hj., S. 1050.
- 16) Harscheidt, S. 40-44.
- 17) Hj., S. 977.
- 18) Vgl. Albrecht Goetze, Pression und Deformation Zehn Thesen zum Roman Hundejahre. Verlag Alfred Kummerle, Göppingen 1972, S. 13-20.
- 19) Hj., S. 628.
- 20) Hj., S. 627-628.

- 21) Roland Harweg, *Pronomina und Textkonstitution*, Wilhelm Fink Verlag, München 1968, S. 319 – 320.
- 22) Vgl. Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens*, Wilhelm Fink Verlag, München 1976, S. 50 – 66.
- 23) Ebenda, S. 143 – 169.
- 24) Vgl. Hj., S. 1110 ; Vgl. Gerhard Kaiser, Günter Grass-Katz und Maus, Wilhelm Fink Verlag, München 1971, S. 44.
- 25) Hj., S. 680.
- 26) Hj., S. 813.
- 27) Hj., S. 976.
- 28) Hj., S. 660.
- 29) Hj., S. 722.
- 30) Hj., S. 817.
- 31) Hj., S. 893.
- 32) Hj., S. 1017.
- 33) Hj., S. 1135.
- 34) Harscheidt, S. 69 及び S. 73 ; この図表は筆者が若干加筆修正したものである。
- 35) Hj., S. 1014.
- 36) Goetze, S. 87 ; Vgl. H.R. Müller-Schwefe, *Sprachgrenzen*, Verlag J. Pfeiffer, München 1978, S. 48. ; Vgl. Marcel Reich-Ranicki, Günter Grass : Hundejahre. In : *Grass Kritik · Thesen · Analysen*, hrsg. von Manfred Jurgensen, Francke Verlag, Bern und München 1973, S. 21 – 30.

(大学院博士課程)